

武装解除

平野 榮子（昭和8年生まれ）

一九四五年八月九日早朝、突然のソ連軍によるハイラル空爆、そして昼過ぎ「日本人は忠霊塔前に集合」の命令が出て、何も持たずに家を出る。それきり家には帰れず、駅を目指すよう指示されたが、すでに駅には列車も無く、東ハイラル駅まで歩く。運よく撫順ぶじゆんから来ていた石炭用無蓋車むがいしや注1に乗り、夕刻まさに命からがらハイラルを脱出した。私、十二才だった。

翌朝、札蘭屯じゃらんとんに到着。一週間知人宅にお世話になり、八月十五日終戦の詔勅しょうちよくを聞く。十七日、これ以上お世話になれないということで母と私共兄弟四人はごった返す札蘭屯駅じゃらんとんで何とか貨車に乗る。出来るだけ南下しようとの気持ちだったが列車は昂々溪こうこうけいでストップ。全員おろされてしまった。

昂々溪こうこうけいの軍を頼って皆、兵舎の庭につめかける。兵隊さんたちが守って下さると言う安堵感あんどかんから、ほっとし、思い思いに営庭えいてい注2に散り休息する。軍では、倉庫を開放し缶づめ、乾パン等食糧をたくさん下さった。何でもたくさんあり、さすが軍隊だと子ども心にもびっくりした。営庭にはどんどん重要書類等が運び出され火が放たれた。ハイラルの軍官舎が紅蓮の炎に包まれていたのを思い出し、悲しかった。

やがてソ連兵数名が乗ったジープが一台入って来た。うす汚れた白布が棒に付けられ、兵舎前にたてられた。ああ、降伏。何たるみじめさ。うつろな思いでこの光景を眺めていた。兵隊さん達は全員兵舎前に整列、銃やサーベル、武器がことごとく山の様に積み上げられた。武装解除である。

隊長さんが私達一般市民を集めて言われた。「我々は今、ご覧のように武装解除しました。何一つ武器を持たない丸腰です。夕方ここを出発してチチハルへ向かいます。どんな事が起きるかわからないが、何が起きても決して騒がず、私の言う事を聞いて下さい。この事を絶対に守って頂けるなら、責任を持って、皆さんをチチハルに送り届けましょう。前後に我々が並び、真中に皆さんが入り、歩いて行きます。」それは凜とした声で、隊長さんの覚悟がひしひしと伝わってくる言葉であった。皆すがりつきたい気持ちを大きなうなずきで返し、くい入る様な眼で見つめ合った。

夕刻、頂いた缶づめを背負い、軍に守られながら出発した。睡魔と荷物の重さに耐えかねてせつかく頂いた食糧をぼろぼろと道路に落としながら小学生の弟達の手を母と必死でつかみ、ただ遅れまい、はぐれまいの一心で歩きに歩いた。とその時、煌々とライトこうこうを照らしはるか遠くからソ連の戦車が何十台も迫って来た。「戦車だ！踏みつぶされ

るぞ！」の声に全員色を失った。しかし、轟音^{ごうおん}を響かせてやって来たのはトラック隊だった。あの時の恐ろしさはいまだに忘れられない。トラックがガガッと止まって、バラバラとソ連兵がおり、「ダワイ、ダワイ。」と言いながら、指輪や腕時計を取り上げた。翌朝、無事チチハルへ到着し、兵隊さん達と別れた。

兵隊さん達はその後、満州にあった日本人の財産全てを貨車に積み込まされ、最後に自分達もソビエト連邦に連れて行かれた。即ちシベリア抑留者^{注3}にされてしまったのだ。

私達日本人も敵国の中にいるのだから衣・食・住 全部を奪われ、飢えと寒さ（冬の寒さは-35℃以下）、病気とのたたかいに明け暮れ、毎日が死との対峙であった。

一年余に及ぶ難民生活の後、幸運にも生かされて帰国できた私、戦争の愚かさ、悲惨さを強く次代の人達に語りついで行きたい。

注1 砂利、鉱石、木材などの雨に濡れてもかまわない積荷を運ぶために用いられる貨車の一種

注2 軍隊の居住する兵舎を中心とした一定区域の広場

注3 第二次世界大戦の終結後、武装解除され投降した日本兵捕虜らが、当時のソビエト連邦によってシベリアへ労働力として移送隔離され、長期に渡る抑留生活と強制労働により多くの死者が出た。

旧満州国地図

1935年(昭和10年)頃の地図



現在の地図



○満州国とは
1932年(昭和7年)から1945年(昭和20年)の間、満州(現在の中国東北部)に存在した国家。1931年(昭和6年)に勃発した満州事変後、日本の関東軍によって満州全土が占領され、その後、関東軍主導のもと独立した国家として満州国が建国された。